

そとがく

10月号(No.31)

19.10.19 発行

現職研修委員会

総合的な学習部編集



「2007夏に学ぶ」

生活総合指導員

山内貴弘

猛暑といわれた今夏、市内でも多くの研修会が開かれ、熱心な先生方が総合的な学習の時間に関する現状と実践を学び、こちらも熱い自己研鑽を積まれた。八月一日に南部市民センターで行われた基礎研修会では、実践発表として甲山中学校の鈴木先生が、前任校の豊富小学校での実践である「食育」の発表をされた。印象に残ったのは、意見交換の時間に家庭科の先生方から家庭科の教科の立場から意見が出たことである。総合的な学習の時間で設定された内容は、家庭科の時間でも教材として配列されている。ゆえに互いの目標がぶれたり、混乱したりしないように、子どもの学びを見通すことの必要性が論じられた。残念ながら、時間が限られており、議論が焦点化されなかったが、教科と総学の共存という課題が残った。また、教職経験十一年目を迎える先生方を対象とした研修の中で、「キャリア教育」をテーマとした講義が設定され、福岡中の各務先生が、数年にわたって学校体制で取り組んでこられた「生き方学習」の

発表をされた。職場体験、修学旅行などの学校行事の中で生徒達の問題意識が連続し、自らの生き方を高めていく実践であったが、数年にわたる実践と考察の積み重ねにより、生徒が深い領域で「生き方」を考えた重厚な実践であった。そんな中、三教研の夏期研修会の中での講話で鳴門教育大学の西村先生のお話は、この2つの研修会の意義と実践の価値を改めて感じさせてくれる内容であった。先生は、これまでの総合的な学習の時間のおゆみを草創期ととらえ、その成果と課題を分析し、改善の方向性を探る必要性を具体的事例をもとに説かれた。「教科、道徳、特別活動との連携を図るカリキュラムの創造や小中連携によって、「知」をどのようにカリキュラムに生かすか」「失敗に学び、新たな課題を発見し、自己肯定感や自尊感情を育てることの必要性」を話しながら、先生は「二十一世紀の人間形成をイメージされ、講話された。総合学習は、二十年、三十年、五十年先の社会形成者を育てる時間である」という先生の長いスパンからすると教科指導は、今を生きる武器であり、総学は、未来を生きる鍵であるといえる。私たちはこの夏、食育の実践により、教科と総学が知識と学び方を定着させる

ことやキャリア教育では、生徒が自己を見つめ、「生き方のキーワード」を身につけていくことの有効性を検証した。
西村先生は、「総合のプロはいない。教師の現代社会に対する課題意識が重要である」とされた。まさに岡崎の二人の実践者は、スパンの長い懐の深い教師であることを実感させてくれた。

情報コーナー

夏季基礎研修会報告

研修 研究実践発表

Let's 食育！ 体験を通して自分たちの食に関心を抱く子どもの育成を目指して、5年生「とよとみ学習」『食を見つめる』の実践を通して実践内容

- ・食品成分表調べから、食に興味をもたせる
- ・着色したジュースの試飲から、視覚と味覚のつながりを学ぶ
- ・マヨネーズ・無添加クッキー作りを通して、添加物の必要性和食の安全性を考える
- ・食事・おやつ調べを通して、自分の食を振り返る
- ・ディベート「加工食品を使ふこと」賛成か反対か
- ・無添加手作りデザートの開発と発信
- ・評価方法の工夫

自己評価と相互評価の両方を用いて、自分たちの学びを振り返り、相互評価の中から友達の見解のよさにも目を向け、友達からの評価によって

意欲を高めることにつながった。また、自己評価と平行して食生活日記をつけ、保護者の方にアドバイスを記入していただく活動も取り入れた。このことで、家庭との関係も密になり、児童の意欲の高揚につながることができた。

研修

愛知教育大学 中野真志先生によるご指導

鈴木先生の実践について

- ・手立てが緻密に練られており、体験活動を通して学びを深めていこうとする姿がすばらしい。
- ・学校が家庭や保護者を変えていく力を持つてい

ることを実感することができた。そのためには、外部への発信が重要であるが、鈴木先生の実践では、その発信が的確に行われている。

- ・学びの連続性がよく考えられていて、評価方法も児童の学び意欲を喚起する内容となっている。
- ・課題として、カリキュラムの縦（小中の連携）の関係を意識し、学びの経験をどう次へつなげるか考える必要がある。また、協力的でない保護者に対して、その子をどう支援していくかも家庭との連携を図る上で重要である。

総合的な学習の価値ある実践に向けて その危険性からの検討とカリキュラムデザイン

- ・総合的な学習の危険性

目標があいまいになり、断片的で無計画になりやすい

活動するだけで認識が深まるわけではない。

個性を重視しすぎて社会化の過程を軽視する。

従来の学力観、評価観に依存・固執してはならない。

教師の力量形成の難しさ

- ・カリキュラムデザイン

目指す子ども像の明確化は学校全体のカリキュラム計画から

どのように課題を見つけるか。

柔軟なカリキュラム作り

教師間の協力による組み立て

- ・地域社会とのかかわり

地域素材の開発 教師が率先して地域素材を学ぶ

地域のプラス面だけでなく、マイナス面も教材になる。

外部講師活用の難しさ

一方通行でなく、学校と地域の双方向を目指す。

二教研究夏季研修会報告

城南小学校 尾崎智佳

八月三日に岡崎市の甲山会館で、三河教育研究会

総合的な学習部夏季研修会が行われました。

第一分科会では、豊川の先生からユニセフに募金

をするために学級のみならずフリーマーケットに取り

り組んだ実践や、豊橋の

先生からは「自分の夢」

をテーマに職場訪問や職

場調べを行い、働くこと

について自分の考えを深

めていった実践が提案さ

れました。

協議では学級全体で取

り組んでいく学習活動に

対して個の問題意識をど



う把握して支援していったらよいか話題となりました。学習過程では、フリーマーケットの開催のような、学級が一丸となって行う特活的な取り組みはよくあるので、みんなでやりきるといふ学級全体の達成目標と同時に、それぞれの個の思い(目的意識)を見取り、個の学び方や考え方が深化していくように的確な支援を図っていくことが大切であるという意見が述べられました。

また、小学生が実際に地域に出て職場訪問をした豊橋の実践に対して、多くの先生方からその学習の現代的な価値を評価する意見が述べられました。その一方で、教師が気付かせたいという意識が強すぎてしまい、働く意義などの抽象的な勤労観についての話し合いが中心になってしまったので、もっと働く人とのふれ合いや職場訪問で抱いた小学生の素直な思いを大事にした学習にしていた方がよかったのではないかと指摘もありました。今、話題となっているキャリア教育の小学生段階のあり方からも、何を子どもにつかませ、育てていくかということをよく考慮して学習の構想を図っていくことの必要性を感じました。

また、子どもたちが実生活や実社会に関わって、自己の生き方の探究を図っていくことが重要であると思いました。総合的な学習はストレートに実生活や実社会と関わっていくことができるので、この利点を十分に活かして子どもの実態と想いを踏まえながら、価値ある学習に仕向けていく教師の構想力が重要だと思えます。この意味からも、岡崎の先生方の総合的な学習に対する真摯な取り組みとこれまでの実践の質の高さを再確認することができました。

城北中 山本先生の提案の様子

